

○「小郡市社会を明るくする運動作文コンテスト」受賞作文(NO 2)

「校長室だより」の前号でお知らせしたように、「第17回小郡市“社会を明るくする運動”作文コンテストで6年生のO・Sさんが最優秀賞を、同じく6年生のD・Kさんが奨励賞を受賞しました。前号では、O・Sさんの受賞作文を紹介しておりましたので、今回は、D・Kさんの受賞作文を紹介いたします。

感じたことから



見守っているよ、大丈夫だよ

麻生学園小学校 六年 D・K

去年、社会を明るくする運動の作文で賞をいただいたぼくは、表彰式で保護観察所の方のお話を聞くことができた。

「保護観察所って何だろう？」

よく分からないので、一緒に式に参加した母に聞いてみた。すると、録画してあった2022年に再放送された

「NHKスペシャル ばっちゃん 子どもたちが立ち直る場所」

という番組を観るようすすめられた。それは、広島に住む元保護司の中本さんの話だった。最近増えている「子ども食堂」の元祖を作った人だ。

中本さんは言う。

「罪を犯してしまう子どもはおなかをすかせている。」

「行き場所のない子どもがさまよう。さまよう子には良い居場所がない。」

「さまよう子の親自身も家庭のぬくもりを知らずに育ってきた人が多い。悪い循環からぬけ出せずにいるから心がすさんでしまう。」

中本さんの言葉一つひとつには重みがあった。ぼくが初めて知ることばかりで驚いた。中本さんは、そんな子どもたちのために、長年自宅で手料理をふるまい続けてきたそうだ。非行に走る子どもの中には、立ち直るのが早い子もいれば時間がかかる子もいる。中本さんは何度も悪いことをしても、

「おかえり、えらかったね。」

と、子どもたちをむかえるのだ。番組の中である女の子が言った。

「誰にたよればいいのか分からぬ。わたしに味方はいないのかも知れないと思った。でも、今は自分を不幸だとは思わない。同じあやまちを繰り返さなければいいだけだから。」

ぼくははっとした。どうか。どんなにつらい環境で育ち、そうして悪い道に進んでしまったとしても、この女の子のように、中本さんみたいな人と出会い、家庭のあたたかさを感じて、中本さんの真似をしようとする。そのことで悪循環を止めることができる。

なんて大きな一步なんだろう。中本さんは子どもの居場所を作る、手料理を食べさせる、あせらずに長い目で見守る。そして、そつとよりそう。子どもたちが何度も失敗してもあたたかくむかえてくれるのだ。

中本さんによると、最近増えてきている「子ども食堂」の活動には地域の人たちの理解と協力が必要だということだ。何か問題が起きてしまうのではないかと心配する人の気持ちも分かる。しかし、「子ども食堂」のような地域の見守りが悪循環からぬけ出せない人の救いとなり、それが明るい社会へつながっていくのではないかと思う。

社会を明るくしていくためにはどうしたらいいのか。それは、

「人。」

今のはぼくが出した答えた。どんな人と出会うのか。どんな人とつながるのか。

「助けて。」

と言ってもいい世の中にしていく。人の目の温かさが居場所のない人を救うのだ。

合言葉は、

「助けて。」

「見守っているよ、大丈夫だよ。」

そんな言葉をかけ合える世の中にいていきたい。

